

マルコ13章と神殿
ダニエル書との間テキスト性

山口希生

キリストと世界 29号抜刷 2019.3.1

マルコ 13 章と神殿

ダニエル書との間テキスト性

山口希生

(東京基督教大学非常勤講師)

1 問題の所在

マルコ福音書において、イエスのエルサレム入城以降の一連の出来事の中で「神殿 (ιερόν)」は中心的な位置を占めている。イエスはエルサレムに入城してから直ちに神殿に向かい、そこで「すべてを見て回った」¹。翌日には神殿の境内から両替人や鳩売りを追い出し、神殿を「強盗の巢」と呼ぶなど、衝撃的な言動を行っている。このイエスの神殿での行動を巡ってエルサレムの最高法院 (サンヘドリン) を構成する祭司長たち、律法学者たち、長老たちとの論争が神殿内でなされる。イエスを論争では打ち負かせないと見るや、祭司長たちはイエス殺害を計画、そしてイエスの逮捕、裁判、十字架刑による処刑へと続いていく。このような神殿を巡る緊迫した流れの中で、マルコ 13 章は一見すると前後の文脈から孤立した、逸脱的な挿話であるような印象を与える。自らの神殿での行動の意味を明らかにするかのよう、神殿の崩壊を予告するイエスに対し、弟子たちは「いつ、そのようなことが起こるのですか」と尋ねる²。だが、その問いに対してイエスは、神殿よりもむしろ「世界」の終わりについて話し始めたように見える。そこに唐突感があるのは否めない。特に、マルコ 13 章そのものがユダヤ人キリスト教徒によって挿入された黙示的文書であるという、コラーニの非常に影響力のある見解が 19 世紀に発表されてからは、マルコ 13 章を独立した章として見る見方が学界において一つの有力な見方として定着してきた³。

1 マルコ 11:11 [新改訳 2017]

2 マルコ 13:4 [新改訳 2017]

3 マルコ 13 章の包括的な解釈史として、George R. Beasley-Murray, *Jesus and the Last Days: The Interpretation of the Olive Discourse* (Peabody: Hendrickson, 1993) を参照。

そのような見方に対し、マルコ 13 章をその前後の文脈と密接に結びつけて理解しようとする試みが英国の聖書学者らによってなされてきた。特に重要なのが 1965 年にロンドン大学でジョージ・ケアードが行った講義である。ケアードはここで、マルコ 13 章の主たる内容がキリストの再臨と世界の終わりであるとする通説に疑問を呈し、イエスがここで語っているのは終始一貫して「エルサレムとその神殿の終わり」についてであると論じた⁴。ケアードはこの議論を彼の代表作である *The Language and Imagery of the Bible* でさらに発展させ、以下のように論じている。

マルコ 13 章は、イエスが神殿の破壊を予告し、4 人の弟子たちはそれがいつ起きるのか、と尋ねるところから始まる。徹底的終末論によれば、マルコはこのもっともな問いに対するイエスの答えを提示する代わりに、まったく異なる問いへの答えへと中身を変えている。つまり、「世界はいつ終わるのか？」という問いに対する答えに変えてしまったのだと。けれども、マルコがそんな愚か者だと考えることを十分に正当化できるだろうか。ごく自然な想定とは、マルコがこのイエスの講話を、次のことがいつ起こるのかという問いに対する答えだと見なしているということである。すなわち、エルサレムへの破滅がこの世代の人々が生きている間に起こり、それが起きる時に、諸国を裁く大権を神から与えられた人の子が雲に乗って来るのを彼らが見るだろうということだ(ダニエル 7:22; cf. ヨハネ 5:27、第一コリント 6:2)。⁵

ケアードはここで、「人の子が雲に乗って来る」という、キリストの再臨を指すものと伝統的に解されてきたフレーズを、イエスとその信託者たちの正しさが立証さ

コラーニ (T. Colani) については、特に 13-20 頁を見よ。

- 4 G. B. Caird, *Jesus and the Jewish Nation* (London: The Athlone Press, 1965). ケアードの重要な先駆的研究として、J. R. Russell, *The Parousia*. 2nd ed. (London: T. Fisher Unwin, 1887), 80-81; Ezra P. Gould, *Critical and Exegetical Commentary on the Gospel according to St. Mark* (Edinburgh: T & T Clark, 1896), 250-52. を参照。
- 5 G. B. Caird, *The Language and Imagery of the Bible* (London: The Trinity Press, 1980), 266-67. [山口訳]

れ、同時にイエスに敵対する勢力が神に裁かれることを意味する象徴表現と解した。イエスに敵対する勢力とは、大祭司を頂点とするエルサレム当局であり、彼らは紀元70年の神殿崩壊によってその権力基盤を失った。ダニエル書7章では、人の子のような方が天の雲に乗って「年を経た方」のもとに進み、そこで全世界の主権を与えられ、他方で人の子と聖徒らを迫害した獣が裁かれる様が描かれているが、マルコはこの箇所をイエスの戴冠とエルサレム当局への裁きを指すものとして理解した、ということである。

ケアードのこのような解釈は、彼とは独立した形でR・T・フランスが、またケアードから博士論文の指導を受けたN・T・ライトが、それぞれ異なるアプローチで発展させている⁶。しかし、これらの学者たちの大きな影響力にもかかわらず、彼らの学説は学界において十分に受け入れられているとは言いがたい⁷。むしろ、14節から23節までは紀元70年のエルサレム神殿の崩壊を予告しているが、24節から27節まではキリストの再臨について語っていると見做す学者たちが少なくない⁸。その最も大きな理由の一つは、24節から27節には神殿はおろか、エルサレムへの言及が全くないためだろう。それどころか、マルコ13章5節以降のイエスの講話の中には、「神殿」という言葉が一度も登場しないのである。イエスは神殿の崩壊の時期について尋ねられたのに、彼の講話の中に神殿への直接の言及が一度もないのはなぜなのか。マルコ13章への高い関心にもかかわらず、先行研究においてこの問い

-
- 6 R. T. France, *Jesus and the Old Testament: His Application of Old Testament Passages to Himself and His Mission* (London: Tyndale Press, 1971), 227-39; R. T. France, *The Gospel of Mark* (Grand Rapids: Eerdmans, 2002), 494-540; N. T. Wright, *Jesus and the Victory of God* (Minneapolis: Fortress, 1996), 339-67. 尚、フランスはマルコ13:32節以降はキリストの再臨についてであるという立場を取る。
- 7 フランスとライトへの批判としては、Edward Adams, *The Stars Will Fall from Heaven: Cosmic Catastrophe in the New Testament and its World* (London: T & T Clark, 2007), 133-81がある。また、彼らの立場を支持する研究としては、Thomas R. Hatina, *In Search of a Context: The Function of Scripture in Mark's Narrative* (London: Sheffield Academic Press, 2002), 325-73.
- 8 例えば、Ben Witherington III, *The Gospel of Mark: A Socio-Rhetorical Commentary* (Grand Rapids: Eerdmans, 2001), 345-48; Robert H. Stein, *Mark* (Grand Rapids: Baker Academic, 2008), 593-616, 特に611頁; Mary Ann Beavis, *Mark* (Grand Rapids: Baker Academic, 2011), 199-200. など。

に対する議論は十分になされてこなかったのではないか。本稿はこの疑問に取り組み、マルコ 13 章の理解を深めることに貢献することを目的としている。

本稿では、マルコ 13 章 14 節から 23 節までと、24 節から 27 節までとを別々の出来事ではなく、連続的・統一的に解釈する見方を支持する根拠として、マルコ 13 章とダニエル書との関係に注目する。マルコ福音書の記者はイエスの講話とダニエル書との間に強固な間テクスト的 (intertextual) 関係を構築することによって、イエスの講話の中に「神殿の崩壊」というテーマを通奏低音のように響かせている。特に注目すべきなのは、ダニエル書では「神殿の崩壊」は「『人の子のような方』が栄光を受けること」と同じ時間軸で起こるとされていることである。この点が、マルコ 13 章 14 節から 23 節と、24 節から 27 節との関係を考察する上で大変重要であることを本稿で立論していく。

ダニエル書において「神殿 (聖所)」の命運は大きな関心事であり、ダニエルは「あなたの荒れ果てた聖所に御顔の光を照り輝かせてください」と祈る⁹。だが、その後にダニエルに与えられた一連の幻は彼には不可解なものであった。ダニエルはその解き明かしを求めたが、「このことばは終わりの時まで秘められ、封じられている」と言われ、その願いは聞き入れられなかった¹⁰。マルコはイエスをその秘められ、封じられた啓示を明かす人物として描いているのである。

2 マルコ 13 章とダニエル書との間テクスト性

本セクションでは、マルコ 13 章とダニエル書には強固な間テクスト性があることを示し、イエスの講話の内容がダニエル書 7 章以降に現れる三つの幻（「人の子のような方」の戴冠の幻を含む 7 章、エルサレムとその神殿に関する 9 章 24 節から 27 節までの幻、神の民の艱難や神殿への冒瀆に係わる終わりの時についての 12 章の幻）と密接にかかわっていることを論証していく。そして、ダニエル書の上記の三つの幻が全て同じ「三年半」という時間軸での出来事であることは、これらの幻は同一の出来事を多角的に示すための黙示文学特有の「並行的な幻 (parallel visions)」という文学手法であることを強く示唆する¹¹。つまり、ダニエル書の幻に

9 ダニエル 9:17 [新改訳 2017]

10 ダニエル 12:9 [新改訳 2017]

11 John. J. Collins, *The Apocalyptic Imagination: An Introduction to Jewish Apocalyptic*

においては、「人の子の到来」と「神殿の冒瀆」は同じ「三年半」という期間の中で起こることだとされているのだ。このことは、マルコ13章における「神殿の冒瀆(14節から23節)」と「人の子の到来(24節から27節)」との関係を理解する上で重要な意味を持つことを論じていく。

(a) 『荒廃させる忌むべきもの』

先に指摘したように、マルコ13章5節以降のイエスの講話の中では、「神殿」という言葉が一度も登場しない。だが、ほとんどの学者は14節の中に、エルサレム神殿への仄めかしがあると想定している。そしてそのような想定は、本節とダニエル書との間テキスト性を認めることによって成り立つものである。つまり、14節の『荒廃させる忌むべきもの (τὸ βδέλυγμα τῆς ἐρημώσεως)』とは、ダニエル書からの引用であり、またその『荒廃される忌むべきもの』が現れるのはエルサレム神殿であると見なされているのだ。

マルコ 13:14

しかし、『荒廃させる忌むべきもの』があつてはならない所に据えられているのを見たならば(読む者は理解するように)、ユダヤにいる者は山に逃げなさい。¹²

“Ὅταν δὲ ἴδῃτε τὸ βδέλυγμα τῆς ἐρημώσεως ἐστηκότα ὅπου οὐ δεῖ, ὁ ἀναγινώσκων νοεῖτω, τότε οἱ ἐν τῇ Ἰουδαίᾳ φευγέτωσαν εἰς τὰ ὄρη,

マタイ福音書とは異なり¹³、マルコ福音書では預言者ダニエルは言及されていない。だが、マルコが「読む者は理解するように」と注釈を加えることで読者に注意を促していることの一つが、イエスの言葉とダニエル書との間テキスト性であることは疑いえない。なぜなら、『荒廃させる忌むべきもの (τὸ βδέλυγμα τῆς ἐρημώσεως)』やその類語は、ダニエル書に繰り返し現れるライトモチーフだからである。ダニエル書のギリシャ語訳には古ギリシャ語訳 (Old Greek) とテオドティ

Literature, 3rd ed. (Grand Rapids: Eerdmans, 2016), 133-34.

12 ここでは私訳を用いた。以下、マルコ13章の訳は私訳を用いる。

13 マタイ24:15参照。

オン訳 (Theodotion) の二つがあるが¹⁴、マルコと一致するフレーズが現れるのは古ギリシャ語訳のダニエル 12 章 11 節である。また、ダニエル書 8 章 13 節での異なる表現 (「荒廃させる罪 (ἡ ἀμαρτία ἐρημώσεως)」、ἐρημώσεις が複数形になっている 9 章 27 節、そして 11 章 31 節の冠詞なしの用法 (βδέλυγμα ἐρημώσεως) もその類語といえるだろう。なお、マルコ 13 章 14 節の βδέλυγμα が中性名詞であるのに対し、その動詞 ἵστημι が男性形の分詞であるという文法的に特異な組み合わせから、『荒廃させる忌むべきもの』とは「もの」ではなく「人」、特に反キリストを指し示しているとの示唆がなされることがある¹⁵。だが、このような文法的には不整合な組み合わせはマルコ福音書では前例のないものではないことから¹⁶、そこに特別な意味を読み込むのは行き過ぎだと思われる。

さて、これらのダニエル書のテキストの中でも、マルコ 13 章 14 節との関係では逐語的に一致したフレーズが登場する 12 章 11 節が注目される。他方で、後に見ていくように、アデラ・ヤルブロ・コリンズはマルコ 13 章 14 節がダニエル書 9 章 27 節を解釈したものだと論じている¹⁷。だが、これら二つのダニエル書の箇所の中からかを選ぶ必要はない、なぜならダニエル書 12 章とダニエル書 9 章 24 節以降の幻は、これから示すように互いに深く関連しているからだ。そこでまず、ダニエル書 9 章 27 節と 12 章 11 節とを以下で詳しく考察していく。

これに関連して、マルコはダニエル書を引用したり言及したりする際に、どの旧約聖書のテキストを用いたのかという重要かつ困難な問いがある。これから見ていくように、マルコ 13 章は全体的に見れば古ギリシャ語訳 (以下の引用では OG と略記) と最も親和性が高いと思われるが、マルコ 14 章 62 節の場合には以下のよ

14 ギリシャ語テキストは、*Septuaginta: Id est Vetus Testamentum graece iuxta LXX interpretes*, rev. ed., Alfred Rahlfs (Stuttgart: Deutsche Bibelgesellschaft, 2006). を用いる。古ギリシャ語訳は三つの写本のみであるのに対し、テオドティオン訳の方が写本はずっと多い。

15 Martin Hengel, *Studies in the Gospel of Mark*, trans. John Bowden (Philadelphia: Fortress, 1985), 18-19.

16 マルコ 9 章 20 節では、悪霊 (中性名詞) に男性形の分詞の動詞が用いられている。

17 Adela Yarbro Collins, *Mark: A Commentary*, Hermenia: A Critical and Historical Commentary on the Bible (Minneapolis: Fortress, 2007), 608.

うに、むしろテオドティオン訳（Theod と略記）と一致する。

マルコ 14:62

[...] καὶ ἐρχόμενον μετὰ τῶν νεφελῶν τοῦ οὐρανοῦ.

ダニエル書 7:13

OG : [...] καὶ ἰδοὺ ἐπὶ τῶν νεφελῶν τοῦ οὐρανοῦ ὡς υἱὸς ἀνθρώπου ἤρχετο [...]

Theod : [...] καὶ ἰδοὺ μετὰ τῶν νεφελῶν τοῦ οὐρανοῦ ὡς υἱὸς ἀνθρώπου ἐρχόμενος ἦν [...]

さらに注意すべきなのは、そもそもダニエル書のマソラ本文とギリシャ語訳との関係も定かではないことだ。レスター・グラッベは以下のように慎重に記している。

それゆえ、七十人訳とマソラ本文とのいくらかの相違は、起こり得る改変によって説明が可能である。しかし、七十人訳がすべての場合において二次的であるとか、七十人訳はマソラ本文を訳したものだとは、それほど明確には言えない。どちらも、より早い時期の預言（oracle）にその共通の起源を持つこともありうる。¹⁸

換言すれば、ダニエル書に関しては、マルコの執筆時には今日現存するテキスト（マソラ本文、古ギリシャ語訳、テオドティオン訳）¹⁹以外のテキストが存在し、マルコがそれを用いていた可能性も排除できないのである。このような本文研究上の

18 Lester L. Grabbe, "The Seventy-Weeks Prophecy (Daniel 9:24-27) in early Jewish Interpretation," in *The Quest for Context and Meaning: Studies in Biblical Intertextuality in Honor of James A. Sanders*, ed. Craig A. Evans and Shemaryahu Talmon (Leiden: Brill, 1997), 599. [山口訳]

19 上記三つのテキスト以外にも、死海文書においてダニエル書テキストが発見されているが、その詳細な分析は本稿の目的を超える。死海文書で発見されたダニエル書については、Eugene Ulrich "The Text of Daniel in the Qumran Scrolls," in *The Book of Daniel, Volume 2: Composition and Reception*, ed. John J. Collins and Peter W. Flint (Leiden: Brill, 2001). を参照。

不確実性に鑑み、本稿では現存するダニエル書のすべてのテキストに注目し、テキスト間で大きく内容が異なる場合は、二つのテキストが支持する読みの方を基本的には重視することにした。本稿ではマソラ本文については基本的に「新改訳 2017」に準拠するので、以下では古ギリシャ語訳とテオドティオン訳について私訳を供する²⁰。

ダニエル書 9:27

OG : [···]そして7の終わりには献げものと献酒とは取り去られ、そして神殿には成就に至るまで『荒廃させる忌むべきもの』があり、そしてその成就が荒廃させるものの上²¹に下るだろう。

[···] και ἐν τῷ τέλει τῆς ἐβδομάδος ἀρθήσεται ἡ θυσία καὶ ἡ σπονδή καὶ ἐπὶ τὸ ἱερόν βδέλυγμα τῶν ἐρημώσεων ἔσται ἕως συντελείας καὶ συντέλεια δοθήσεται ἐπὶ τὴν ἐρήμωσιν

Theod : [···]そして7の半ばに献げものと献酒とは取り去られ、そして神殿には時の成就に至るまで『荒廃させる忌むべきもの』があり、そしてその成就が荒廃させるものの上²²に下るだろう。

[···] και ἐν τῷ ἡμίσει τῆς ἐβδομάδος ἀρθήσεται μου θυσία καὶ σπονδή καὶ ἐπὶ τὸ ἱερόν βδέλυγμα τῶν ἐρημώσεων καὶ ἕως συντελείας καιροῦ συντέλεια δοθήσεται ἐπὶ τὴν ἐρήμωσιν

ダニエル書 12:11

OG : 常供の献げものが取り去られ、そして『荒廃させる忌むべきもの』が与えられるように用意されてから、1,290 日。

ἀφ' οὗ ἂν ἀποσταθῇ ἡ θυσία διὰ παντός καὶ ἐτοιμασθῇ δοθῆναι τὸ βδέλυγμα τῆς ἐρημώσεως ἡμέρας χιλίας διακοσίας ἐνενήκοντα

Theod : そして通常のもので変更される時から、そして『荒廃させる忌むべきもの』が与えられてから、1,290 日。

20 ダニエル書のギリシャ語テキストの邦訳には『七十人訳ギリシャ語聖書 ダニエル書』(秦剛平訳、青土社、2018年)がある。

καὶ ἀπὸ καιροῦ παραλλάξεως τοῦ ἐνδελεχισμοῦ καὶ τοῦ δοθῆναι βδέλυγμα
ἐρημώσεως ἡμέραι χίλια διακόσiai ἐνεθήκοντα

ダニエル書では、これらすべてのケースにおいて、『荒廃させる忌むべきもの』とはエルサレム神殿での献げものが取り去られた（中止された）後に、そこに据えられる何ものかを指している。それが具体的に何であるのかはテキスト上からは特定できないが、神殿を穢す何かであるのは確かである²¹。ここから、マルコ福音書の場合にも『荒廃させる忌むべきもの』が現れるのはエルサレム神殿だと見なすのは妥当であろう。

さて、ここで注目すべきなのは、ダニエル書9章27節と12章11節に描かれている出来事が、同じ時間軸の中で起こるものとされていることだ。ダニエル書9章によれば、神の民と聖都シオンのためには「70の7」（ἐβδομήκοντα ἑβδομάδες; ダニエル9:24）という時間軸が設定されており、27節は最後の7（七年間を意味する）²²に該当する期間である。古ギリシャ語ではその7の終わりに、またマソラ本文とテオドティオン訳ではその7の半ば（7は七年間を意味するので、すなわち三年半）に神殿での献げものが中止される²³。ダニエル書12章11節の場合には、献げものが中止され、『荒廃させる忌むべきもの』が与えられてから終わりの時までには「1,290日」とされているが、この日数はどの暦を採用するのかにもよるが、閏月を含めた太陰暦では三年半を意味する（360日×3.5年+30日=1,290日）²⁴。この解釈は、12章7節の「ひと時とふた時と半時（すなわち3.5）」（εἰς καιρὸν καὶ καιροὺς καὶ ἡμισυ καιροῦ）とも調和する²⁵。つまり、ダニエル書9章27節（少なくともマソラ本文とテオドティオン訳では）でもダニエル書12章11節でも、神殿での献げものが中止されてから三年半の間、『荒廃させる忌むべきもの』がそこに据えられる、と預言されているのである。換言すれば、ダニエル書9章27節と12章11節と

21 第一マカバイ記1章54節では、アンティオコス・エピファネスによるエルサレム第二神殿の祭壇への冒瀆行為と解されている。

22 John J. Collins, *Daniel: A Commentary on the Book of Daniel*, Hermenia: A Critical and Historical Commentary on the Bible (Minneapolis: Fortress, 1993), 352.

23 ヘブル語では、「半週の間、いけにえとささげ物をやめさせる」[新改訳2017]となっている。

24 John Goldingay, *Daniel* (Nashville: Thomas Nelson, 1996), 310.

25 J. J. Collins, *Daniel*, 400.

は三年半という期間に起こる同じ出来事を描いているということになる²⁶。以下で、これまでの議論をまとめてみよう。

	ダニエル書 9 章	ダニエル書 12 章
出来事	献げものが取り去られ、『荒廃させる忌むべきもの』が神殿に据えられる	献げものが取り去られ、『荒廃させる忌むべきもの』が与えられる
期間 (1)	7 の半ば (= 三年半)	ひと時とふた時と半時 (= 三年半)
期間 (2)		1,290 日 (= 三年半)

そして、この時間軸という観点からは、これら二つの節は 8 章 13-14 節や 11 章 31 節とは区別される。8 章 13-14 節では、献げものが取り去れ、「荒廃させる罪 (ἡ ἀμαρτία ἐρημώσεως)」が与えられてから、聖所が清められるまでに 2,300 の夕と朝があるとされている。これを 2,300 日と取るか、1,150 日と取るかについては学者たちの見解は分かれるものの²⁷、いずれにせよこの期間は三年半を表すものではない。それゆえ、8 章 13-14 節と、上記の二つの節 (9:27 と 12:11) は類似した神殿での冒瀆的な出来事を描いてはいるが、同一の出来事ではないということになる。また 11 章 31 節に描かれている出来事についても、先の二つの節で描かれている出来事とは同一視できない。9 章 27 節も 12 章 11 節も、『荒廃させる忌むべきもの』が神殿に据えられるのは「終わりの時」に起こる出来事とされているのに対し、11 章 31 節の出来事は「終わりの時」の前に起こる出来事とされているからだ²⁸。換言すれば、ダニエル書には神殿への複数回の冒瀆行為が記述されているが、「終わりの時」における三年半の神殿への冒瀆を描いているのが 9 章 27 節と 12 章 11 節だということである。それゆえ、マルコ福音書 13 章 14 節が読者に注意を向けさせているのも、これら二つの節である可能性が高い。

(b) 『これらすべてのこと』

マルコ 13 章 14 節の他にも、マルコ 13 章にはダニエル書との間テキスト性を示唆する重要な箇所がある。それは、『これらすべてのこと (ταῦτα πάντα)』というフレーズである。マルコ 13 章において、4 節の『これらすべてのこと』がいつ起

26 J. J. Collins, *Daniel*, 400.

27 Goldingay, *Daniel*, 213.

28 ダニエル 11:35, 40 を参照。

きるのかという弟子たちの問いは、『これらすべてのこと』がこの世代の内に起きるといふ13章30節のイエスの答えと対応しており²⁹、イエスの講話のインクルーシオを形成していると見られる。この点についてのフランスの見解は引用に値する。

「これらすべてのことが成就しようとする (μέλλη ταῦτα συντελεῖσθαι πάντα)」のはいつなのかという問いと、「これらすべてのことが起きる (ταῦτα πάντα γένηται)」まではこの世代は過ぎ去ることはないであろう、という答えには、明らかな連続性がある。もし前者のフレーズが神殿の破壊を指すものならば(そして、これまで見てきたように、この文脈には他の指示対象を示すものはない)、後者もそうであるに違いない。したがって、ここでの文脈における ταῦτα πάντα は、イエスが14節から27節まで予告してきた複合的な出来事全てを指しているのに違いないのだ。³⁰

マルコ13章の『これらすべてのこと (ταῦτα πάντα)』という重要なフレーズは、ダニエル書12章7節にも現れる。以下で論じるように、マルコがここでダニエル書との間テキスト性を意識していたことは十分に考えられる³¹。そこで、これら三つのテキストを詳しく見ていこう。

マルコ福音書 13:4

私たちにお語りください、いつこれらのことがあるのでしょうか、またこれらすべてのことが成就しようとするときにどんなしるしがありますか。

εἰπὸν ἡμῖν, πότε ταῦτα ἔσται καὶ τί τὸ σημεῖον ὅταν μέλλη ταῦτα συντελεῖσθαι πάντα;

マルコ福音書 13:30

アーメン、私はあなたがたに言う、これらすべてのことが起きるまで、この世代が過ぎ去ることはないであろう。

29 ここでの ἡ γενεὰ αὐτῆς の解釈はフランスに従う (France, *The Gospel of Mark*, 538-39)。

30 France, *The Gospel of Mark*, 540. [山口訳]

31 アダムスもこの点に着目している。だが、そこから導かれる結論は本稿とは全く異なる。Adams, *The Stars Will Fall from Heaven*, 140-41.

Ἀμὴν λέγω ὑμῖν ὅτι οὐ μὴ παρέλθῃ ἡ γενεὰ αὕτη μέχρις οὗ ταῦτα πάντα γένηται.

ダニエル書 12:6-7

OG：そして私は水の上において亜麻布を着た人に言った、「それで、あなたが私に語った驚くべきことや、これらの清めの成就是いつなのでしょう」。そして、私は川の水の上において亜麻布を着た人（が言うの）を聞いた、「成就の時まで」、そしてその人は右の手と左の手を天に向けて差し出して、そしてとこしえに生きておられる方に誓った、「聖なる民の解放の両手の成就まで、ひと時とふた時と半時、そしてこれらすべてのことは成就するだろう」。

καὶ εἶπα τῷ ἐνὶ τῷ περιβεβλημένῳ τὰ βύσσινά τῳ ἐπάνω πότε οὖν συντέλεια ὧν εἶρηκας μοι τῶν θαυμαστῶν καὶ ὁ καθαρισμὸς τούτων καὶ ἤκουσα τοῦ περιβεβλημένου τὰ βύσσινά ὃς ἦν ἐπάνω τοῦ ὕδατος τοῦ ποταμοῦ ἕως καιροῦ συντελείας καὶ ὕψωσε τὴν δεξιὰν καὶ τὴν ἀριστερὰν εἰς τὸν οὐρανὸν καὶ ὤμοσε τὸν ζῶντα εἰς τὸν αἰῶνα θεὸν ὅτι εἰς καιρὸν καὶ καιροὺς καὶ ἡμισυ καιροῦ ἡ συντέλεια χειρῶν ἀφέσεως λαοῦ ἁγίου καὶ συντελεσθήσεται πάντα ταῦτα

Theod：そして彼は川の水の上において亜麻布を着た男に言った、「あなたが語られた驚くべきことの終わりはいつまでなのでしょうか。」そして私は、水の上にいる、亜麻布を着た男（が言うのを）聞いた、そして彼は右の手と左の手を天に向けて差し出して、そしてとこしえに生きておられる方に誓った、「ひと時とふた時と半時まで。聖とされた民の力の離散の完了において、彼らはこれらすべてのことを知るだろう」。

καὶ εἶπεν τῷ ἀνδρὶ τῷ ἐνδεδυμένῳ τὰ βαδδὶν ὃς ἦν ἐπάνω τοῦ ὕδατος τοῦ ποταμοῦ ἕως πότε τὸ πέρας ὧν εἶρηκας τῶν θαυμασιῶν καὶ ἤκουσα τοῦ ἀνδρὸς τοῦ ἐνδεδυμένου τὰ βαδδὶν ὃς ἦν ἐπάνω τοῦ ὕδατος τοῦ ποταμοῦ καὶ ὕψωσεν τὴν δεξιὰν αὐτοῦ καὶ τὴν ἀριστερὰν αὐτοῦ εἰς τὸν οὐρανὸν καὶ ὤμοσεν ἐν τῷ ζῶντι τὸν αἰῶνα ὅτι εἰς καιρὸν καιρῶν καὶ ἡμισυ καιροῦ ἐν τῷ συντελεσθῆναι διασκορπισμὸν χειρὸς λαοῦ ἡγιασμένου γνώσονται πάντα ταῦτα

マルコ 13 章 14 節と古ギリシャの訳のダニエル書 12 章 7 節とでは、『これらすべてのこと』というフレーズのみならず、動詞（συντελέω）においても一致している。

また、語彙上の一致のみならず、内容においても共通する部分が極めて大きい。古ギリシャ語訳の12章6節で、ダニエルは「これらの清めの成就是いつなのでしょうか」と尋ねているが、そこで問題にされているのが『荒廃させる忌むべきもの』によって引き起こされた神殿の穢れが清められることであるのは文脈から明らかだ。つまり、「これらすべてのこと」には、マルコ13章でもダニエル書12章でも『荒廃させる忌むべきもの』によって引き起こされる神殿の危機が含まれているのである。なるほどマルコ福音書での弟子たちとは異なり、ダニエルは神殿が破壊される時期を尋ねたのではないが、いずれの場合にも『荒廃させる忌むべきもの』によって危機に晒された神殿の命運についての強い関心が示されている。

さらには、マルコ福音書においてもダニエル書においても「これらすべてのこと」には神殿と同時に、神の民の命運が含まれている。特に、神の民を襲うであろう「大いなる苦難 (θλίψις) の時」というテーマがどちらにも現れる。

マルコ 13:19

そしてそれらの日には、神が創造をされた創造の初めから今に至るまで起きたことがなく、そしてこれからもないような艱難があるだろう。

ἔσονται γὰρ αἱ ἡμέραι ἐκεῖναι θλίψις οἷα οὐ γέγονεν τοιαύτη ἀπ' ἀρχῆς κτίσεως ἣν ἔκτισεν ὁ θεὸς ἕως τοῦ νῦν καὶ οὐ μὴ γένηται.

ダニエル 12:1³²

OG : [...]それは艱難の日であり、それは彼らが生まれた時からその日に至るまで起きたことがないものだ[...]

[...] ἐκεῖνη ἡ ἡμέρα θλίψεως οἷα οὐκ ἐγενήθη ἀφ' οὗ ἐγενήθησαν ἕως τῆς ἡμέρας ἐκείνης [...]

Theod : [...]そして艱難の時があるだろう。民族が地の上に生じてから、その時に至るまで起こったことがないような艱難が[...]

[...] καὶ ἔσται καιρὸς θλίψεως θλίψις οἷα οὐ γέγονεν ἀφ' οὗ γεγένηται ἔθνος ἐπὶ τῆς γῆς ἕως τοῦ καιροῦ ἐκείνου [...]

32 ヘブル語では、「国が始まって以来その時まで、かつてなかったほどの苦難の時が来る」[新改訳2017]。

「神の民を襲う空前絶後の艱難」というテーマが、マルコ 13 章とダニエル書 12 章のいずれの場合にも『これらすべてのこと』に含まれているという事実は、マルコがダニエル書 12 章との間テキスト性を念頭に置きながら ταῦτα πάντα というフレーズを用いたという推論の蓋然性をさらに高める。

(c) 神殿の破壊

先に、アデラ・ヤルブロ・コリンズはマルコが 13 章 14 節で特にダニエル 9 章 27 節を念頭に置いていると論じていることを指摘した。ダニエル書 9 章 24 節以降の 490 年（「70 の 7」）というタイム・スパンに第二神殿期後期のユダヤ人たちが深い関心を持っていたことは死海文書などからも窺い知ることができるが³³、マルコもそのようなダニエル書 9 章への関心を共有していた、とコリンズは想定しているのである³⁴。この見解について、以下で考察していこう。

これまで論じてきたように、マルコ 13 章との間テキスト的な結びつきが最も強いのはダニエル書 12 章の方であるが、その 12 章と 9 章 26-27 節とは同じ「三年半」という時間軸に置かれており、これらは同一の出来事を異なる視点で語りなおすという「並行的な文」である可能性が高い。それゆえ、マルコ 13 章がダニエル書 12 章と並んで 9 章とも深い関係を持っていると見なすことに蓋然性はあるだろう。また、ダニエル書 9 章 26-27 節で特に重要なのは、ここではダニエル書で唯一、明確に神殿の破壊が予告されていることだ。弟子たちのイエスへの問いは神殿の破壊の時期についてであるので、「神殿の破壊」というテーマに関するマルコ 13 章とダニエル書との間テキスト性を考える上で、この箇所は特に重要である。ダニエル書 9 章 26 節は難解な箇所であるので、詳しく見ていく必要がある。

ダニエル 9:26

OG：そして 7 と 70 と 62 の後に、油塗られた者（キリスマ）は除かれ、いなくなるだろう。そして諸民族の王が油注がれた者（キリスト）と共に都と聖所とを破壊するだろう [...]。

καὶ μετὰ ἑπτὰ καὶ ἑβδομήκοντα καὶ ἐξήκοντα δύο ἀποσταθήσεται χρίσμα καὶ

33 4Q180, 181; 『メルキゼデク・テキスト (11QMelch)』; 『ダマスコ文書』等を参照せよ。ダニエル書 9 章の第二神殿期における大きな影響については、J. J. Collins, *Daniel*, 353 を見よ。

34 A. Y. Collins, *Mark*, 608.

οὐκ ἔσται καὶ βασιλεία ἐθνῶν φθереῖ τὴν πόλιν καὶ τὸ ἅγιον μετὰ τοῦ χριστοῦ
[…]

Theod :そして7(複数形)と62の後に、油塗られた者(クリスマ)は完全に絶たれ、そこには裁きはないであろう。そして彼は来るべき指導者と共に都と聖所とを徹底的に破壊するだろう[…]

καὶ μετὰ τὰς ἐβδομάδας τὰς ἐξήκοντα δύο ἐξολεθρευθήσεται χρίσμα καὶ κρίμα
οὐκ ἔστιν ἐν αὐτῷ καὶ τὴν πόλιν καὶ τὸ ἅγιον διαφθереῖ σὺν τῷ ἡγουμένῳ τῷ
ἐρχομένῳ[…]

この一節は様々な意味で極めて曖昧であり、解釈者に多くの問題を突き付ける。まず、時間軸の問題である。マソラ本文においては、「その六十二週の後」となっているところが、「7と70と62の後に」(OG)または「7(複数形)と62の後に」(Theod)となっている。ヘブル語の **מֵשֶׁבַע** が「70」とも「7(複数形)」とも読むことが可能なため、翻訳者の間に異読が生じたものと思われる³⁵。また、マソラ本文の **מֶשִׁיָּא** (メシア)はギリシャ語訳では **χρίσμα** (油塗られた者)と訳されているが、古ギリシャ語訳では **χριστός** (キリスト)なるもう一つの称号の人物が登場し、しかも彼は「諸民族の王」と共に都と聖所とを破壊する、と言われている。このように、各テキスト間での相違も多く、また内容的にも大変難しい箇所であるものの、「キリスト」と「神殿の破壊」が同時にテキスト上に現れるこの一節が、原始教会の関心を集めたとしても不思議ではない。実際に、教会教父たちはこの一節が、ローマの将軍ティトスによる紀元70年のエルサレム神殿の破壊の予言であると解した³⁶。つまり、ダニエル9章26節とイエスの神殿崩壊の予告は、教父たちにはどちらもティトスによる神殿破壊によって成就されたものとして理解されていたのである。教父たちのこうした理解がどれほど早い時期にまで遡るのかはもちろん議論の余地があるが、ダニエル書9章24節以降の幻がマルコ13章の講話の背景にあるというコリンズの説には妥当性があると言えよう。そしてこれは、マルコが『荒廃させる忌むべきもの』という言葉によって読者に注意を喚起した時、彼が特に念頭に置いて

35 Grabbe, "The Seventy-Weeks Prophecy," 599.

36 アレクサンドリアのクレメンス『ストロマイティス』第一巻21章125-126等を参照せよ(同書の邦訳は、秋山学訳、教文館、2018年)。Grabbe, "The Seventy-Weeks Prophecy," 610.

いたのがダニエル書 9 章 26-27 節とダニエル書 12 章の二か所であったとする本稿の論旨を強く支持するものである。

(d) 「人の子が雲に乗って来る」

これまでに論じてきたように、マルコ 13 章とダニエル書との間にはいくつかの注目すべき間テキスト性が認められる。しかし、これまで指摘した事例はほのめかし (allusions) に留まっており、あるいは見過ごされる場合もあるだろう。それに対し、マルコ 13 章において唯一明白な形でダニエル書から引用されているのがマルコ 13 章 26 節である。本節の「人の子が雲に乗って来る」という表現がダニエル書 7 章 13 節から引用されているのは明らかだが、ではどのような意味でそれが用いられているのかが問題となる。ダニエル書 7 章の元来の文脈では、「人の子が雲に乗って来る」というフレーズは、「人の子」によって表象あるいは代表される神の聖徒たちに世界の主権が与えられ、そして「獣」によって表象される神の聖徒たちを迫害する勢力が裁かれることを意味している³⁷。そして人の子が雲に乗って向かう先は地上ではなく天上であり、そこで人の子は世界の主権を受けられる。だが、マルコ 13 章 26 節の「人の子が雲に乗って来る」というフレーズは、伝統的には人の子たるキリストが天に昇ることではなく、地上へ下る再臨を指すと解釈されてきた。換言すれば、ダニエル書の元来の意味とは逆の意味でこのフレーズが用いられている、と考えられてきたのである。冒頭で述べたように、本稿はマルコ 13 章の「人の子が雲に乗って来る」とは再臨を指すのではなく、イエスとその信徒者たちの正しさが立証され、彼らを迫害する勢力に裁きが下された歴史的な出来事、つまり紀元 70 年のエルサレム神殿崩壊を指しているとする立場を支持する。以下ではその論拠を示し、さらには本稿の冒頭で提示した問題点、すなわちなぜマルコ 13 章のイエスの講話には「神殿」という言葉が一度も使われていないのかという問いに対する答えを併せて提示する。

マルコ福音書では本節を含めて三か所でダニエル書 7 章 13 節からの引用がなされており、しかも次のようにそれぞれ非常に重要な局面で使われている。

37 ダニエル 7:13-14・18・26-27 (N・T・ライト、山口希生訳『新約聖書と神の民 (上巻)』新教出版社、2015 年、512-524 頁を参照)。

マルコ福音書 8:38-9:1

「それゆえ、誰でもこの姦淫と罪の世代において私と私の言葉とを恥じるならば、人の子もまた、聖なる天使たちと共に御父の栄光の中に来るときに、彼を恥じるだろう」。そして彼らに言われた、「アーメン、私はあなたがたに言う。ここに立っている者の中の幾人かは、神の王国が力と共に来るのを見るまでは、死を味わうことがないだろう」。

ὁς γὰρ ἐὰν ἐπαισχυθῆ με καὶ τοὺς ἐμοὺς λόγους ἐν τῇ γενεᾷ ταύτῃ τῇ μοιχαλίδι καὶ ἀμαρτωλῷ, καὶ ὁ υἱὸς τοῦ ἀνθρώπου ἐπαισχυθήσεται αὐτόν, ὅταν ἔλθῃ ἐν τῇ δόξῃ τοῦ πατρὸς αὐτοῦ μετὰ τῶν ἀγγέλων τῶν ἁγίων. Καὶ ἔλεγεν αὐτοῖς· ἀμὴν λέγω ὑμῖν ὅτι εἰσὶν τινες ὧδε τῶν ἐστηκότων οἵτινες οὐ μὴ γεύσωνται θανάτου ἕως ἂν ἴδωσιν τὴν βασιλείαν τοῦ θεοῦ ἐληλυθυῖαν ἐν δυνάμει.

マルコ福音書 13:26-27

そしてそれからあなたがたは人の子が偉大な力と栄光と共に雲の中に来るのを見るだろう。そしてそれから彼は使者たちを遣わして選ばれた者たちを天の四方から、地の果てと天の果てから集めるだろう。

καὶ τότε ὄψονται τὸν υἱὸν τοῦ ἀνθρώπου ἐρχόμενον ἐν νεφέλαις μετὰ δυνάμεως πολλῆς καὶ δόξης. καὶ τότε ἀποστελεῖ τοὺς ἀγγέλους καὶ ἐπισυναξέει τοὺς ἐκλεκτοὺς [αὐτοῦ] ἐκ τῶν τεσσάρων ἀνέμων ἀπ' ἄκρου γῆς ἕως ἄκρου οὐρανοῦ.

マルコ福音書 14:62

それでイエスは言われた、「私が^s（キリスト）だ、そしてあなたがたは人の子が^s力（ある方）の右に座し、天の雲と共に来るのを見るだろう」。

ὁ δὲ Ἰησοῦς εἶπεν· ἐγὼ εἰμι, καὶ ὄψεσθε τὸν υἱὸν τοῦ ἀνθρώπου ἐκ δεξιῶν καθήμενον τῆς δυνάμεως καὶ ἐρχόμενον μετὰ τῶν νεφελῶν τοῦ οὐρανοῦ.

マルコ福音書では、イエスがメシア（キリスト）であることは当時の人々に対しては秘密にされているが³⁸、それが明らかにされる二つの場面（ベテロの告白の際

38 特にマルコ 8:30を見よ。

に弟子たちだけに、そしてイエスの裁判において公然と)でダニエル書7章の「人の子」が言及されている。そしてもう一つの引用がマルコ13章のイエスの講話のクライマックスとも言うべき26節でなされている。換言すれば、マルコ福音書のいくつかの山場で繰り返しダニエル書7章の「人の子」が登場するのである。このことからマルコ福音書全体にとってのダニエル書7章の重要性は疑うべくもない。そして上記の三つの箇所も、互いに深く関連していると思われる。さらには、マルコ福音書9章1節で語られる「神の王国が来る」とは、「人の子が来る」とことと実質的に同じことを指示していると思われる。これについてアデラ・ヤルプロ・コリンズは次のように論じる。

王国が「力と共に」または「力強く」(ἐν δυνάμει) 来るだろうという考えは、13章26節の人の子が「大なる力と栄光と共に」(μετὰ δυνάμεως πολλῆς καὶ δόξης) 来るという描写と類似している。したがって、9章1節は人の子の到来を指していると思われべきである。³⁹

この指摘は、神の王国と人の子の到来がどちらもこの世代の人々の幾人かが生きている間に起こるとされている(9:1; 13:30; 14:62)点からも裏付けられる。そしてコリンズは8章38節-9章1節と13章26節、また14章62節の全てはエルサレム神殿での崩壊ではなく、「人の子=イエス」の地上への再臨を指している、と解する⁴⁰。だが、この解釈は特に14章62節については十分な説得力がない。コリンズは、マルコは詩篇110篇1節(七十人訳では109篇1節)への仄めかしによってキリストの高挙を、そしてダニエル書7章13節によってキリストの再臨を指し示そうとしていると論じる⁴¹。しかし、これら二つの旧約聖書の箇所が別々の指示対象を指しているというのは疑問である。マルコ福音書の特徴として、複数の旧約聖書の箇所が統合されることがしばしば見られるが⁴²、それは立証においては二人

39 A. Y. Collins, *Mark*, 413. [山口訳]

40 A. Y. Collins, *Mark*, 409-13, 614-5, 704-5. コリンズは、キリスト教第一世代は彼らが生きている間に再臨が起きると期待していたが、それは実現しなかった、と示唆する (cf. 413, n.164)。

41 A. Y. Collins, *Mark*, 705.

42 例として、マルコ1:2-3。

または三人の証人を必要とする旧約聖書の伝統に則っているとも考えられる⁴³。そしてマルコ14章62節においては、詩篇110篇1節もダニエル書7章13節も同一の事柄を立証するために用いられていると思われる。本節の構造もこの点を強く支持する。

ὄψεσθε (「あなたがたは見るだろう」)

τὸν υἱὸν τοῦ ἀνθρώπου (「人の子を」: ダニエル7:13)

① ἐκ δεξιῶν καθήμενον (現・中・分) τῆς δυνάμεως (詩篇110:1)

② καὶ ἐρχόμενον (現・中・分) μετὰ τῶν νεφελῶν τοῦ οὐρανοῦ (ダニエル7:13)

本節の直近の文脈で問題となっているのは、「イエスは何者なのか」という問いである。そこでイエスは、自分は人の子であり、人の子とは「①神の右に座す(つまり神から全権を与えられる)ようにと招かれる者」⁴⁴、そして「②世界の全権を与えられるために父なる神のところへ導かれる者」だと、旧約聖書の二つの証言によって自らのアイデンティティを立証しているのである。このように、少なくともマルコ14章62節において「人の子が雲に乗って来る」というフレーズが意味しているのはキリストの再臨ではなく、イエスが神から世界の全権を与えられることだと言えよう。では、問題のマルコ13章26節の場合はどうか。この問題を考えるためには、ダニエル書7章13節そのものを詳しく考察していく必要がある。

ダニエル書7章13節を理解するために重要なのは、ダニエル書7章と他の幻との関係である。先に見てきたように、ダニエル書9章と12章では神殿が『荒廃させる思むべきもの』によって汚される期間が三年半だとされている。同時に、12章7節では「聖なる民」が大きな艱難に遭う期間も「ひと時とふた時と半時(=三年半)」であるとされている。そして、ダニエル書7章の幻においても、「いと高き方の聖なる者たち」は同じ期間、苦難に遭うとされている。

ダニエル 7:25

43 Rikki E. Watts, *Isaiah's New Exodus in Mark* (Tübingen: Mohr Siebeck, 1997), 89, n.186. 申命記19:15を参照せよ。

44 Wright, *Jesus and the Victory of God*, 551.

OG : そして彼はいと高き方に言葉を吐き、いと高き方の聖なる者たちを消耗させ、暦と律法を変えようと企むだろう。そしてひと時とふた時と半時に至るまで、すべては彼の両手に渡されるだろう。

καὶ ῥήματα εἰς τὸν ὕψιστον λαλήσει καὶ τοὺς ἁγίους τοῦ ὕψιστου κατατρίψει καὶ προσδέξεται ἀλλοιωῦσαι καιροὺς καὶ νόμον καὶ παραδοθήσεται πάντα εἰς τὰς χεῖρας αὐτοῦ ἕως καιροῦ καὶ καιρῶν καὶ ἕως ἡμίσεος καιροῦ

Theod : そして彼はいと高き方に言葉を吐き、いと高き方の聖なる者たちを衰えさせ、暦と律法を変えようとするだろう。そしてひと時とふた時と半時に至るまでそれは彼の手には渡されるだろう。

καὶ λόγους πρὸς τὸν ὕψιστον λαλήσει καὶ τοὺς ἁγίους ὕψιστου παλαιώσει καὶ ὑπονοήσει τοῦ ἀλλοιωῦσαι καιροὺς καὶ νόμον καὶ δοθήσεται ἐν χειρὶ αὐτοῦ ἕως καιροῦ καὶ καιρῶν καὶ ἡμισυ καιροῦ

聖なる者たちは三年半にわたって苦難を受けるが、やがて彼らを迫害する獣は裁きを受け、聖徒たちは神から主権と権威とを受ける (7 章 27 節)。そしてここで重要なのは、彼らが主権を受けることは、「人の子のような方が雲に乗って来る」とことと実質的に同じ出来事を指していることだ。それは 7 章 13-14 節と 27 節とを比較すれば明らかである。

ダニエル 7:13-14

OG : 私は夜の幻の中で見続けていた、そして見よ、天の雲の上に人の子のような方が来られ、日の老いたる方のところまで来た。側に仕える者たちが彼といた。そして、権威が彼に与えられ、そして民族ごとに地の国々のすべてと栄光のすべてが彼に仕える。そして彼の権威は取り去られることのない永遠の権威で、彼の王国は滅ぼされることはない。

ἐθεώρουν ἐν ὁράματι τῆς νυκτὸς καὶ ἰδοὺ ἐπὶ τῶν νεφελῶν τοῦ οὐρανοῦ ὡς υἱὸς ἀνθρώπου ἤρχετο καὶ ὡς παλαιὸς ἡμερῶν παρῆν καὶ οἱ παρεστηκότες παρῆσαν αὐτῷ καὶ ἐδόθη αὐτῷ ἐξουσία καὶ πάντα τὰ ἔθνη τῆς γῆς κατὰ γένη καὶ πᾶσα δόξα αὐτῷ λατρεύουσα καὶ ἡ ἐξουσία αὐτοῦ ἐξουσία αἰώνιος ἥτις οὐ μὴ ἀρθῆ καὶ ἡ βασιλεία αὐτοῦ ἥτις οὐ μὴ φθαρῆ

Theod : 私は夜の幻の中で見続けていた、そして見よ、天の雲と共に人の子のような方が来られ、日の老いたる方のところまで来て、その前に進み出た。そして彼に主権と名誉と王国とが与えられた。すべての民、すべての部族、すべての言語は彼に仕えるだろう。彼の権威は過ぎ去ることのない永遠の権威であり、彼の王国は滅ぼされることはない。

ἐθεώρουν ἐν ὀράματι τῆς νυκτός καὶ ἰδοὺ μετὰ τῶν νεφελῶν τοῦ οὐρανοῦ ὡς υἱὸς ἀνθρώπου ἐρχόμενος ἦν καὶ ἕως τοῦ παλαιοῦ τῶν ἡμερῶν ἔφθασεν καὶ ἐνώπιον αὐτοῦ προσηνέχθη καὶ αὐτῷ ἐδόθη ἡ ἀρχὴ καὶ ἡ τιμὴ καὶ ἡ βασιλεία καὶ πάντες οἱ λαοὶ φυλαὶ γλώσσαι αὐτῷ δουλεύουσιν ἡ ἐξουσία αὐτοῦ ἐξουσία αἰώνιος ἧτις οὐ παρελεύσεται καὶ ἡ βασιλεία αὐτοῦ οὐ διαφθαρήσεται

ダニエル 7:27

OG : そして彼は天の下の全地の王国の王権と、権威と、大いなる力とをいと高き方の聖なる民に与えた。永遠の王国を統治するために。そして全ての権威は彼に服し、彼に従うだろう。

καὶ τὴν βασιλείαν καὶ τὴν ἐξουσίαν καὶ τὴν μεγαλειότητα αὐτῶν καὶ τὴν ἀρχὴν πασῶν τῶν ὑπὸ τὸν οὐρανὸν βασιλειῶν ἔδωκε λαῷ ἀγίῳ ὑψίστου βασιλεύσαι βασιλείαν αἰώνιον καὶ πᾶσαι αἱ ἐξουσίαι αὐτῷ ὑποταγήσονται καὶ πειθαρχήσουσιν αὐτῷ

Theod : そして王国と権威と満天の下の王たちの大いなる力とは、いと高き方の聖なる者たちに与えられた。彼の王国は永遠の王国、そして全ての主権は彼に仕え、従う。

καὶ ἡ βασιλεία καὶ ἡ ἐξουσία καὶ ἡ μεγαλωσύνη τῶν βασιλέων τῶν ὑποκάτω παντὸς τοῦ οὐρανοῦ ἐδόθη ἀγίοις ὑψίστου καὶ ἡ βασιλεία αὐτοῦ βασιλεία αἰώνιος καὶ πᾶσαι αἱ ἀρχαὶ αὐτῷ δουλεύουσιν καὶ ὑπακούονται

ダニエル書7章と12章との間には、はっきりとした並行関係がある。どちらも三年半にわたって聖なる民が苦しめられるが、その後には彼らは栄光を受ける。ダニエル書7章ではそれが永遠の王国の授与として描かれ、ダニエル書12章では永遠の

命の授与として描写されている⁴⁵。そして「人の子のような方」は、彼らと共に、あるいは彼らを代表して世界の主権を受けるのである。このように、ダニエル書 7 章の「人の子のような方が雲に乗って来る」という印象的な表現は、「神の民の艱難と、その後の永遠の王国の授与」というテーマと併せて考えることで初めてその意味が明らかになってくるものなのである。また、「神の民の艱難」の三年半という期間は、神殿が冒瀆される期間でもある。それゆえ、ダニエル書においては人の子のような方が栄光を受けることと、神殿の命運の間にも密接なつながりがあるのだ。

これまで考察してきたダニエル書 7、9、12 章の関係を、マルコ 13 章との関連をも含めてまとめると次のようになる。

	ダニエル 7 章	ダニエル書 9 章	ダニエル書 12 章
出来事(1)		① 献げものが取り去られ、『荒廃させる忌むべきもの』が神殿に据えられる	① 献げものが取り去られ、『荒廃させる忌むべきもの』が与えられる
出来事(2)	② 「いと高き方の聖徒ら」が獣の手で苦しめられる		② 「聖なる民」が空前絶後の苦難に遭う
出来事(3)	③ 人の子のような方が雲に乗って来て、世界の主権を与えられる		
出来事(4)		④ 都とその神殿が破壊される	
期間(1)	ひと時とふた時と半時 (= 三年半)	7 の半ば (= 三年半)	ひと時とふた時と半時 (= 三年半)
期間(2)			1,290 日 (= 三年半)
マルコ福音書	(24-27 節) ③ 人の子が雲に乗って来る	(14-23 節) ① 『荒廃させる忌むべきもの』が据えられ、② 神の民には空前絶後の艱難が襲う	

このように、ダニエル書 7 章、9 章、12 章は「三年半」という同じ時間軸の上での出来事を描いており、そこには四つの主題が現れる。それらは、① 『荒廃させ

45 ダニエル 12:3 参照。

る忌むべきもの』が神殿に置かれること、②神の民が空前絶後の苦難を経験すること、③人の子が雲に乗って来て、世界の主権を与えられること、そして④都と神殿の破壊、である。そして、①と④のテーマはそれぞれ「神殿」というテーマで密接に係わっており、②と③も「神の民」というテーマ、すなわち神の民への迫害と、その神の民を代表あるいは表象する「人の子」への世界の主権の授与、というテーマにおいて緊密な関係を持っている。

そして注目すべきは、この①、②、③の三つの主題は全てマルコ13章のイエスの講話に登場することである。ここから、マルコ13章とダニエル書7章以降の一連の幻との間には強固な間テクスト性があり、それどころかダニエル書の「三年半」という「神の民」と「神殿」を巡る期間は、マルコ13章のイエスの講話の重要な下部構造(substructure)となっている、と言えるだろう。なるほど④はイエスの講話では直接は言及されないものの、そもそもこの講話自体が「神殿はいつ破壊されるのか」という弟子たちの問いから始まっていることを考えれば、直接の言及はなくとも、イエスの講話の暗黙の中心テーマとなっていると考えることができる。そうであれば、イエスの講話のクライマックスを形成する24節から27節の中に、特に「人の子が雲に乗って来る」という表現の中に「神殿の破壊」という主題を見出すことは十分に可能である。

3 結論

本稿では、マルコ13章のイエスの講話における「神殿」というテーマについて、特にこの講話の中に「神殿」という言葉が一度も用いられていないことをどのように説明すべきかについて、考察した。そして、イエスの講話における神殿のテーマはダニエル書との間テクスト性を通じて浮かび上がってくることを示してきた。ダニエル書の一連の幻において「神殿」は中核的な関心事であり、マルコはダニエル書との間に間テクスト性を築くことで、「神殿」というテーマを通奏低音のようにイエスの講話の中に響かせているのである。また、ダニエル書の一連の幻においては「神の民の艱難」が「神殿への冒瀆」と並行して現れるが、それはマルコ13章においても同様である。そして、「人の子が雲に乗って来る」ことは、ダニエル書においてもマルコ13章においても、これら一連の出来事の頂点をなしている。「人の子が雲に乗って来る」とは迫害された神の民に世界の主権が与えられることであり、そこには「神殿の破壊」を通じて彼らを迫害する勢力に裁きが下ることも含まれているのだ。